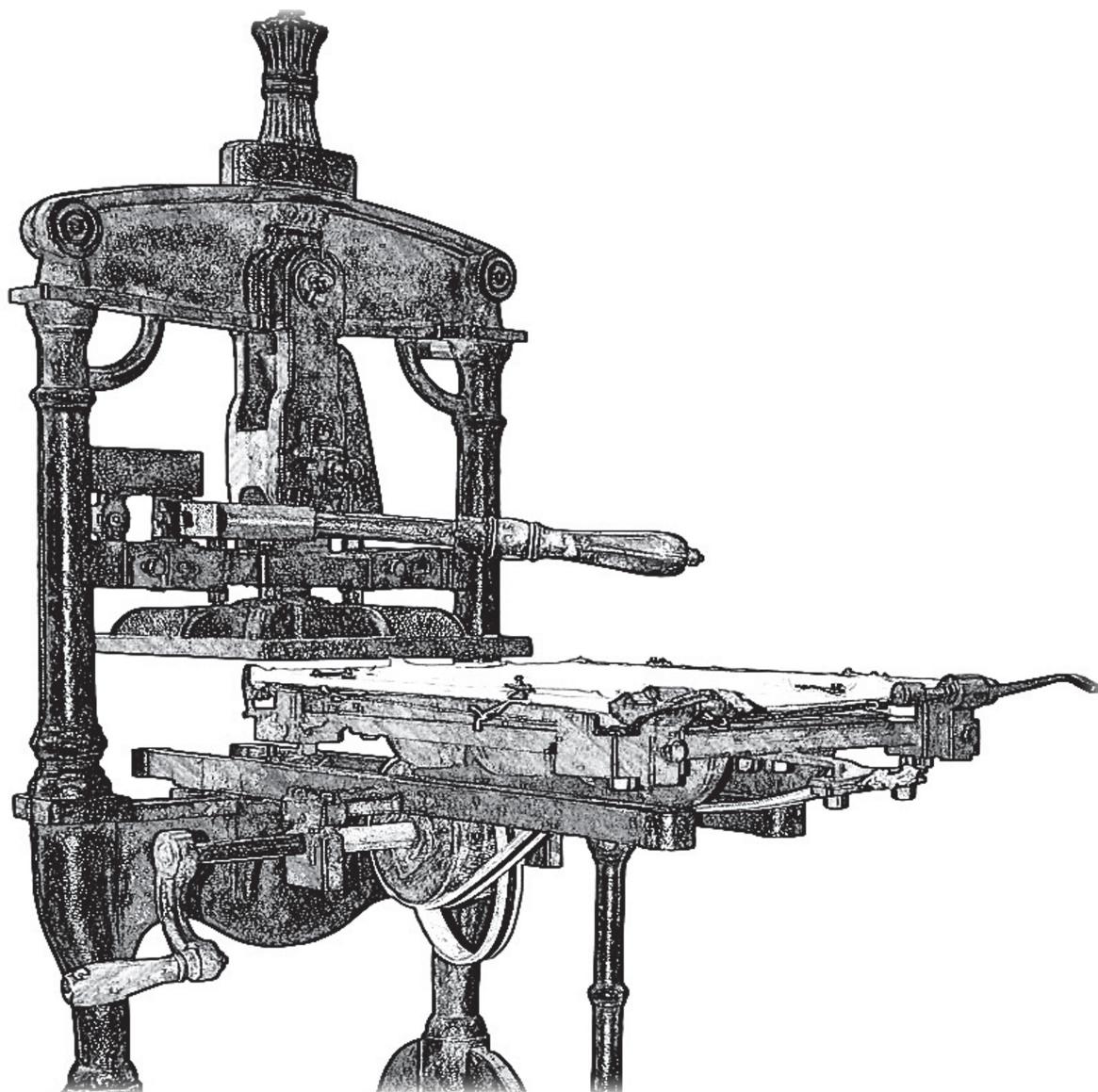


長崎県印刷工業組合所蔵
アルビオン型手引き印刷機



長崎県印刷工業組合 本木昌造顕彰会

長崎県印刷工業組合所蔵 アルビオン型手引き印刷機

モノとコトの回廊 アルビオン型手引き印刷機とは

「手引き印刷機 Hand press」とは手動で操作する印刷機の総称である。

一般にはグーテンベルクがもちいたと想像される印刷機のかたちを継承し、水平に置いた印刷版面に、上から平らな圧盤を押しつけて印刷する「平圧式」の活版印刷機の一種とされる。そのため厳密には手動式であっても、ADANA や Salama-21A やテキンなど、版面が縦型に設置される「平圧印刷機 Platen press」とは区別されている。

グーテンベルクの木製手引き印刷機（1445年頃）は、ブドウ絞り機をヒントに考案された「ネジ棒式圧搾機型印刷機 Screw press」であったとされるが、その活字や鋳造器具と同様に、印刷機も現存していないため、あくまでも想定の域を出ない。



現存する最古の手引き印刷機としては、ベルギーのアントワープにある、プランタン・モレトゥス・ミュージアムの木製手引き印刷機が知られている。またアメリカの政治家として知られるベンジャミン・フランクリン（1706-90）も木製手引き印刷機をもちいて印刷業を営んでいたことが知られている。

グーテンベルクの活版印刷機の時代からその後350年ほどは、細部に改良は加えられたものの、1798年にイギリスのスタンホープ伯爵が、総鉄製の「スタンホープ印刷機」を考案するまでは、活版印刷機の基本構造そのものには大きな変化はなかった。

その後に開発された著名な手引き印刷機としては、「コロンビアン印刷機」「アルビオン印刷機」「スマス印刷機」「ラスベン印刷機」「ワシントン印刷機」「ハーガー印刷機」（以上年代順）などがあげられる。

写真の活版印刷機は、イギリスの活字鋳造所フィギンズ社による1875年製のアルビオン型手引き印刷機である。印刷機としての実用面だけでなく、アカンサス

などの植物模様や猫脚などに装飾の工夫がみられる。

「アルビオン Albion」とは、ちょうどわが国の古称「やまと」と同様に、イングランドをあらわす古名(雅称)である。ラテン語の「白 Albus」を原義とし、ドーバー海峡から望むグレートブリテン島の断崖が、白亜層のために白く見えることに由来する。

アルビオン印刷機は、これに先んじてアメリカで考案された「コロンビアン印刷機」を改良した印刷機である。アメリカ大陸の古名「Columbia」の名をもつ「コロンビアン印刷機」は、1816年頃にクライマーによって考案され、加圧ネジをレバー装置に置き換え、圧盤をテコの応用で楽に持ち上げるためのオモリがアメリカの象徴である鷺の姿をしている。

「アルビオン印刷機」は、この「コロンビアン印刷機」をもとに、圧盤を重いオモリにかえて、頭頂部に内蔵されたバネで持ち上げるなどの改良を加え、1820年頃リチャード・W・コーパー(?-1828)によって考案された。またコーパー社の閉鎖後も格段の規制をもうけなかつたために、キャズロン社、フィギンズ社などが、独自の工夫を加えながら大小様々な同型機の製造を続けていた。

産業革命を経た19世紀末の英国では、すでに蒸気機関などの動力による大型印刷機が商業印刷の主流であったが、アーツ・アンド・クラフツ運動を牽引したウィリアム・モリスは、手工芸再興の象徴として、手動式で装飾的なアルビオン印刷機をもちいていた。また、石彫家にしてタイポグラファでもあったエリック・ギルも同型機をもちいていた。

わが国でも「アルビオン型印刷機」とのつきあいはふるく、明治初期に平野富二が率いた東京築地活版製造所、江川次之進による江川活版製造所など数社によって、アルビオン型の手引き印刷機が大量につくられていた。また明治9年、秀英舎(現・大日本印刷)の創業に際してもちいられた印刷機も、アルビオン型印刷機であったことが写真資料で明らかになっている。

長崎県印刷工業組合所蔵 アルビオン型手引き印刷機の再発見と紹介がなされた

2003年7月19日、わが国の印刷人、タイポグラファにとって嬉しいニュースが流れた。それは長崎県印刷工業組合三階の収蔵庫に、国産「アルビオン型手引き印刷機」が二台所蔵されていることが、朗文堂・片塩二朗によって再発見され、報告されたからである。

そのうちの一台は、横板部に二つの筋違いの正方形の中に「K」のマークがわずかにみられ、版盤なども健在で保存状態は比較的よい。

これは南高有家(島原)の「有正舎」の旧蔵品で『長崎印刷百年史』(田栗奎作 長崎県印刷工業組合 昭和45年11月3日)に写真紹介されていたものである。板倉雅宣は『ハンドプレス・手引き印刷機』(p.64)で、本機は大阪の片田鉄工所製であろうとしている(以下一号機)。

もう一台は、元長崎県印刷工業組合相談役の阿津坂実（1915–2015）によると「九州荷札印刷」の旧藏品であったとする（以下二号機）。機械主要部のほか圧盤までは現存しているが、加圧ハンドル、版盤、版盤案内レール、チンパン、あんとん蓋などは欠損している。

二号機に特徴的なのはその横板にあるマークで、正面（加圧ハンドルのある側）には「TYPE FOUNDRY OSAKA TRADE MARK JAPAN」とあり、大阪活版製造所の機械類のマーク「丸もに旭日」が鋳込まれている。

裏面には「TYPE FOUNDRY TSUKIJI TRADE MARK TOKIO」とあり、東京築地活版製造所の「丸もにH」（ローマン体）のマークが鋳込まれている。

アルビオンとはイギリスの古名で、「アルビオン・プレス」はイギリスのリチャード・コーペが1820年に発明、同工場のジョン・ホプキンソンが1824年に改良した手引き式の活字版印刷機である。

コーペ社が閉鎖されたのちも、格別の保護を主張しなかつたために、英国では数社が同型機の製造を継続していた。

わが国では明治初期から平野富二（東京築地活版製造所）、江川活版製造所、金津鉄工所、国友鉄工所、片田鉄工所などによって国産化され、安定した活字版印刷機として評価され、ふつうは単に「手引き印刷機」と呼ばれていた。

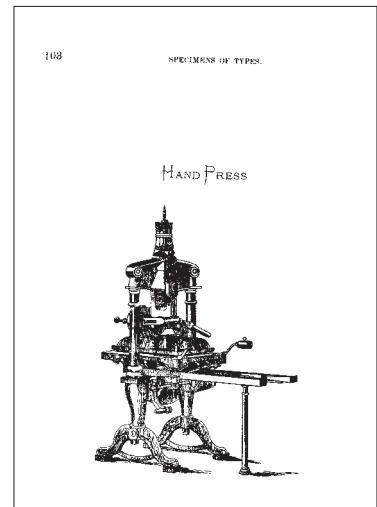
また秀英舎（現・大日本印刷）の創業時の印刷機も「アルビオン・プレス」であったことが、最近創業時の工場写真が出てきたことで判明している。

いずれにしても同型機の多くは昭和中期まで、一部で校正機として用いられていたすぐれた印刷機であった。

活字版印刷術、タイポグラフィとは、活字だけでは成立しない。当然印刷機も必要である。このたび長崎県印刷工業組合から再発見された本機は、平野富二関連では『BOOK OF SPECIMENS MOTOGI & HIRANO』（活版所 平野富二 平野ホール所蔵 推定1877）の最終ページに図版で紹介されていたものとほぼ同一のものである。

しかしながら現状では、一号機には片田鉄工所製とみるのが適當とおもえるが、正確には銘板などがないため、製造元・製造年度などの手がかりがない。

また、横板の両面に製造所名が鋳込まれている二号機も、



その製造が何年であり、また東京築地活版製造所の製造か、大阪活版製造所の製造であつたのかは現状では判明しない。

幸い二号機には上部の横板に製造所名とマークが鋳込まれており、こうしたマークの制定がいつからであったのか、またそのほかの周辺情報を確認していけば、いずれ製造年・製造所の特定にいたることが期待される。

いずれにしても本機の発見は嬉しいニュースであった。なによりも本木昌造と、その師弟であった平野富二／東京築地活版製造所、谷口黙次／大阪活版製造所が誕生した長崎で発見されたことを欣快とした。そして印刷関連業界、タイポグラフィ界・造船工学界・機械工学界の研究者がひとしく同機に熱い視線を注いでいる事実を記録しておこう。

急速に進展した総合技術としての活字版製造術の研究 活字製造だけの陥穀を脱し、関連器械・技術への視点

長崎県印刷工業組合でのアルビオン型手引き印刷機の再発見と紹介がなされたのち、顕著な変化があった。それはこれまで活字版印刷術研究＝タイポグラフィとはいながら、ともすると活字だけに偏するかたむきがみられたのにたいし、総合技藝としてのタイポグラフィの視点から、活字と器械研究への視座の転換がみられたことである。

『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』(近代印刷活字文化保存会 2003年9月30日)は、「本木昌造活字復元プロジェクト」の旗のもとになされた研究であったが、同書の執筆者の多くは、すでに活字製造と関連人物の資料発掘に偏ることなく、その研究の視座を大きく転換していた。

同書刊行の直前、筆者片塩二朗は肺炎から敗血症となって入院中であったが、「文明開化とタイポグラフィ勃興の記録」をしるし、そのコラムとして「長崎県印刷工業組合所蔵アルビオン型手引き印刷機」(p.291)をのこし、両機の保存と再生を希望した。

印刷博物館開館三周年記念企画展図録『活字文明開化——本木昌造が築いた近代』(印刷博物館 2003年10月6日)では、主要展示に同館が所蔵する三台の「アルビオン手引き印刷機」を出し、おおきな関心をよんでいた。

『ハンドプレス・手引き印刷機』(板倉雅宣 朗文堂 2011年9月15日)は、真っ向から手引き印刷機に取り組み論述したものである。著者：板倉雅宣は国内各所に現存している手引き印刷機を丹念に調査し、その形状・マークの採用時期などからそれぞれの印刷機の製造元・製造年度に関して詳述している。

それによると、一号機は手がかりがすくないものの、二号機に関しては、両社のマークの採用時期と照らし、明治18年(1885)から大阪活版製造所の名前が見られなくなる明治末年までの間のものであろうとしている。

『明治近代産業のパイオニア——平野富二伝』(吉谷昌二 朗文堂 2013年11月22日)においては、ついに長崎で発祥した活版製造業のことを、長崎製鉄所による産業の近代化の事業の一環としてとらえ、その中に長崎出身の平野富二の事業を置いて、まったくあらたな視点から、近代産業としての活版製造業にとり組んだ。その成果はおおきく、小指の先ほどもないちいさな活字と、巨大な造船事業が、長崎製鉄所の事業を基盤として誕生し、それがそれぞれ飛躍していった姿を記録し尽くすことに成功した。

長崎と全国のタイポグラファの交流の場となった < Viva la 活版 ばってん 長崎 >



朗文堂サラマ・プレス俱楽部による活版礼讃イベント<Viva la 活版 ばってん 長崎>が長崎県印刷会館を主会場として、2016年5月6-8日開催された。

東京をはじめ、全国各地から訪崎した会員は50余名。マイクロバス二台をレンタして開催された{崎陽長崎 活版さるく}には、地元勢の参加があって45名を超えて

ていた。また会場には熱心な来場者多数を連日お迎えした。

事前準備、撤収作業と、一部の会員は5泊にわたる長崎滞在となり、140年余にわたつて蓄積された長崎の活版印刷事業の奥深さを実感する機会となった。

その際、同館所蔵の小型プラテン印刷機だけでなく、貴重なアルビオン型手引き印刷機もなんとか稼動・実演したいという意見があり、部品の欠損が少ない一号機を復元する試みをした。なにぶん出張先での修復作業であったため、工具も足りず、部品の補充もできずに稼動実現の成果をあげることはできなかった。

また長崎県印刷会館には本木昌造の逝去後の「新町活版所」を経営して、本木昌造の叙位に際して資料提供にあたっていた境 賢治(1844-?)がもちいていたとされる「インキローラー鋳型」があり、これも主会場に展示されて話題を呼んだ。

こうして2003年から13年余の時間が経過した。

おりしも2016年9月2日〔金〕開催の「本木昌造141回忌法要」に際し、長崎県印刷工業組合の力により「アルビオン型手引き印刷機」一号機が修復・復元され、稼動・実演されるとの情報に接した。

とてもうれしく、わが国の印刷産業史に特筆すべき快挙となった。

平成28年9月2日 株式会社朗文堂 片塩二郎

アルビオン・プレスの構造

手引き印刷機の構造はグーテンベルク時代の木製印刷機と基本的には同じである。つまり木版や活字などの版をのせる水平な盤と印刷用紙をのせる胴蓋（tympan）に対面する圧盤（押盤）、印圧を与えるためのハンドルである。

機種によって圧力をかける機構が若干ちがうので名称も異なっている。木製の機種はネジを廻して締め付ける。コロンビアンは多くのレバーを組み合わせている。アルビオンはてこ式レバーをくさびを立てて圧力をかける。ハンドルを引きすぎないようにストップナットもついていて、圧力の調整ができる。

ハンドルを引き、圧力をかけた後に手を離すと自然にハンドルは戻り、圧盤は持ち上がる。コロンビアンは昔の天秤ばかりのように長い梁に平衡おもりを付けて圧盤の重さとのバランスをとって操作を軽くしている。アルビオンはスプリングをつかってハンドルと版盤をもとにもどすようになっている。

版盤は引き出せるようにレールがついている。小型ものは版盤をつかんでレールの上を手で引き出すが、普通の型はレールの下にハンドルがついていて、これを廻すと版盤が圧盤の下から引き出せる。古い型はハンドルの先に木製の円筒状の太いコロがあり、これに平ベルトが二本または三本ついていて、一本は版盤の手前に、もう一本は奥のほうに付けられていて、ハンドルを廻すと版盤を出し入れできる構造になっている。新しいものは平ベルトではなくピニオン・ラック（歯車）方式になる。

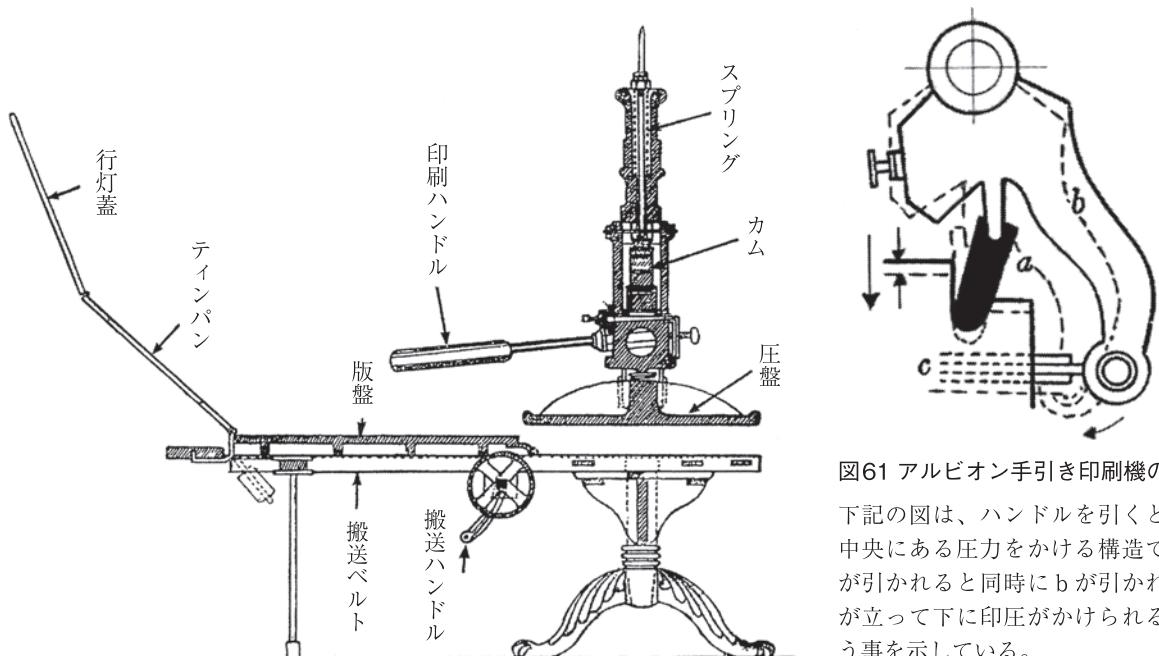


図61 アルビオン手引き印刷機の構造
下記の図は、ハンドルを引くと機械中央にある圧力をかける構造で、cが引かれると同時にbが引かれ、aが立って下に印圧がかけられるという事を示している。

図62 アルビオン手引き印刷機の構造。日本タイプライター『活版印刷の手引き』より

ティンパンに紙を乗せ、印刷摺る部分以外を汚さないように四角く穴をあけたあんどん蓋をかぶせる。一方、版盤には組んだ活字をのせ、膠ローラーでインキを着ける。そこにあんどん蓋を重ねたティンパンをかぶせ、クランクハンドルを廻して、圧盤の下まで移動する。長い印刷ハンドルを引くと機械中央にある特種カムで圧盤が下がり、紙にインキが移される。

板倉雅宣著「ハンドプレス・手引き印刷機」より

長崎県印刷工業組合所蔵

アルビオン型手引き印刷機について①

横板部二つの筋違いの正方形の中に「K」のマーク

版盤等健在で保存状態良い

平成28年8月5日(金)カムを修復(印刷可能に)

有正舎様(長崎県南島原市有家町)寄贈



大阪 片田鉄工所(明治30年創業)製で
明治30年以降製と思われる
(板倉雅宣著「ハンドプレス・手引き印刷機」P64より)

H28.9.2 記



アルビオン型手引き印刷機①
(長崎県印刷工業組合所蔵)

アルビオン型手引き印刷機①の修復について

長崎県印刷会館の3階に2台の古い印刷機がある。どちらもアルビオン型手引印刷機である。1台は九州荷札印刷の旧蔵品であるが、明治20年前後に築地活版製造所製か大阪活版製造所製のものである。もう1台は(有)有正舎の旧蔵品で、保存状態が比較的良好であった。

この度、(有)有正舎の旧蔵品について、福岡市で活版印刷業を営む(有)文林堂の山田善之氏の手により修復が完了し、印刷が可能となった。

(写真1)

平成28年6月24日
機械の状態の確認及び修復方法について
検討し、カムを製作
することとし、サイ
ズの計測等を行つ
た。



(写真2)

平成28年8月5日
制作したカムを微調整してうまく動作する
ことを確認した
後、他の圧盤、版盤等についても調整
し、印刷することが可能となつた。



長崎県印刷工業組合所蔵

アルビオン型手引き印刷機について②

正面に

「TYPE FOUNDRY OSAKA
TRADE MARK JAPAN」

大阪活版製造所の「丸もに旭日」のマーク

裏面に

「TYPE FOUNDRY TSUKIJI
TRADE MARK TOKIO」

東京築地活版製造所の「丸もにH」のマーク

製造が東京築地活版製造所か大阪活版製造所
か現状では不明

機械主要部と厚盤までは現存しているが 加
圧ハンドル 版盤 版盤案内レール ティンパン
あんどん蓋などが欠損している

〔 製造は明治 18 年から明治末年の間と思われる 〕

(板倉雅宣著「ハンドプレス・手引き印刷機」より)

九州荷札印刷 様 (長崎県東彼杵町) 寄贈

H28.9.2 記



アルビオン型手引き印刷機②
(長崎県印刷工業組合所蔵)

本木昌造先生墓参・法要ならびに アルビオン型手引き印刷機の修復について

本木昌造顕彰会
会長 岩永 正人

日本において金属活字による印刷が行われるようになったのは150年ほど前に、長崎のオランダ通詞本木昌造が活字の鋳造に成功してからである。

本木昌造は、江戸末期（1824年）に長崎に生まれ、オランダ通詞本木家の養子となり、稽古通詞となつたが、そのほかにも製鉄・造船・航海などで行跡を残している。長崎製鉄所の頭取の時には長崎の浜町と築町の間を結ぶ橋の架け替えに際し日本最初の鉄製の橋（錆橋）とした。

なかでも活版印刷における業績は燐然と輝いている。本木昌造は苦労の末に「流し込み活字」、その後ガンブルの指導のもと「蟻型電胎法」と呼ばれる活字鋳造法により和文鋳造活字の製造に成功した。その後活版印刷業として「長崎新塾活版製造所」を設立、大阪・東京・横浜に支所を設け、民間印刷業の礎を築いた。日本最初の新聞「横浜新聞」や初の地方紙「長崎新聞」の発行も手がけた。本木昌造先生の手により開化した印刷産業は、高度情報化社会の今日まさに時代の先端を行く産業へと成長発展している。

このような印刷産業における偉業をたたえる目的から日本印刷産業連合会は毎年9月3日を含む9月1日から9月7日を印刷週間と定め、その後9月の1か月間を印刷の月とし、印刷業界をアピールしている。

長崎県印刷工業組合・本木昌造顕彰会では、その遺徳をしのび毎年9月3日に墓参・法要を行っている。

さらに、今年は明治時代以降に活躍していた組合所蔵のアルビオン型印刷機2台のうちの1台の修復を行い、印刷することが可能となった。これは印刷業界にとってもうれしい事である。

平成28年9月2日

平成28年9月2日
本木昌造 第141回法要
長崎県印刷工業組合
本木昌造顕彰会
